

ユングと共時性

秋山さと子



ユングの共時性という概念は、今日ではかなり広範囲に解釈されている。しかし、もともとは、心で勝手に想像するような事柄が、現実の物理的な現象と一致することがある、という意味で、もし、そんなことができるなら、人はさまざまな願望を心に抱くだろうし、それがそのまま実現するとしたら、世の中はめちゃめちゃになってしまう。あらゆる私的な欲望や、神だのみが実現し、中世さながらの迷信的な世界が再来するだろう。

かんだ着想や飛躍的な発想などは、自分の心が生みだすものだが、はっきりとした意識の中から出てくるものではない。自分では動かすことのできない、ほとんど偶然の出来事のような感じで、無意識の奥から浮かびあがってくる。

共時的な現象は、個人の意志によるものではなく、心といってもこうした無意識的な領域からあらわれるものと、具体的な現象との間に起こることのようだ。それでユングは、この合理的な世界を越えた不思議な現象に気がついたようである。

たとえば、夢にはしばしば将来の出来事や、遠隔の地で起きたことを予知する場合がある。誰の夢にも出てくるとは限らないし、明らかに、たとえ夢やファンタジーを通した場合にも、予知能力の強い人と、そうではない人の差異はあるようだ。かつては、こうした現象をより科学的に実験しようとして、念力の有無を調べるために、何千回も念力をかけてさいころを転がしたこともあったが、いつの間にか、そうした実験が消えてしまったのは、長期にわたると、必ずしも念力の存在を証明する結果が

科学の根拠は崩れ、誰かの念力で、この世の合理的法則が曲げられたりしたら、我々は人間関係どころか、地球の引力や天体の動きまで信じられなくなる。しかし、ユングはそういうことが、たまに起こることもあるといったのである。それがユングの共時性であり、事象の非因果的関連という問題点である。

ユングがこういう不思議な現象に気がついたのは、おそらく彼が無意識の世界とかがわかることが多かったからであろう。たとえば、夢や、自分でもどこからあらわれるのかわからないファンタジー、あるいは、ふと心に浮

出なかったからであろう。

しかし、夢の場合には、ごく普通の人に、夢と現実との奇妙な一致が起こることがよくある。私は時々十回位連続して、夢の講義をすることがある。あらかじめ講義を聞く何人かの人たちに、研究資料として実際に見た夢を提出してもらったのだが、たいいてい講義の前半は、ユング心理学で夢を解釈する時に、重要な鍵となる元型について説明することになっている。ところが、その日に「太母」の元型について話をすると、たまたま提出して下さった夢が、母親に関するものが多い。そこで、理論と実際に見られた夢が重なって、とてもわかりやすい。

次の回には、「老賢人」の説明をすると、今度は夢に父と娘の関係など、権威的な「老賢人」を中心としたものが圧倒的に多いのである。そのおかげで、講義が非常にやりやすいが、時にはこの奇妙な一致があまりにも不思議で、ちょっと気持が悪いと思うような時もある。蝶々の夢の話をしていたら、季節はずれなのに、どうして生き残ったのか蝶が一匹、窓からヒラヒラと部屋に入ってきたりする。

これらの現象はもちろん、単なる偶然かもしれないし、それなりに、合理的な説明がある程度はできるかもしれない。たとえば、日本では母親や父親に関する夢を見る人は非常に多いから、私の講義の内容と重なることも少なくないだろう。あるいは、蝶が窓から部屋に入ってくることはめつたにないが、季節はづれで外気が冷たいので、めつたにないような蝶が部屋に舞いこむこともあるかもしれない。

ユング自身は、彼の老賢人のイメージに、フィレモンという名前をつけ、思いつくままに、かわせみのような虹色の翼をつけた老人の絵を描いた。その翌日、彼はチューリヒあたりでは、ほとんど見ることはないかわせみが、傷もないのに湖畔に横たわっているのを見つけたという。彼は自分自身の想像の産物と、実際に見たかわせみの姿との偶然の一致に、非常に感銘を受けた。彼が共時性に注目したのは、こうした一見ありそうもないことが、心に残す強い印象であって、それが心のあり方を一度に変えてしまうようなことさえあった。

ユングは同じようなことが、実はさまざまな占いや霊感たらしい。

東洋的、または仏教的な考え方では、それを縁といって、時には因果関係よりも大きくとることがある。偶然の出会い「なにかの縁があったから」であり、結婚のように二人の男女の出会いを「縁談」と言ったりする。それは確かに、さまざまな偶然が重なってそうなることが多く、必ずしも明確な合理的計算や、因果関係によっているわけではない。

そこにはなにか大きな天の摂理のような力が働いて、決してただの偶然ではなく、ほとんど必然的に人と人が出会ったり、いろいろな事件が起きるものと考えるのである。そして自分で考えた理屈よりも、そうした縁による出来事を大切にすることがある。

ユングは共時性の説明に、それはある街角に立っていると、ふと、向うの角から赤い車が曲がってくるように思ったりするが、その時、まさしく実際に赤い車がやってくるようなことだとも述べている。これはたしかに、見る人の一方的な考えからすれば、偶然の一致だが、もし、はるか上方から見ることであれば、車が横道を走

感による予知などにも起こるのではないかと考えていたし、彼が特に興味をもっていたのは、中国の易である。易が心の中の大きな感情の揺れと現実の事象との関連を指すことで、運命の変化を予知するものであろうと思っていたらしい。

しかし、彼自身はつきりとそれを指摘しているわけではない。ただ、『史記』などに見られる中国の歴史の記述が、たとえば天子の即位というような大きな事件と、あたかもそれとかわかることのように、その年にある地方で冬に春咲く花が咲いたというような、不思議ではあるが、とりたてて言うことでもないようなことが記されていることにも興味を持った。

東洋では、こういうまったく関係のなさそうなことでも、どちらもめめたいというような意味の一致から並記する習慣があるが、ユングには、それが珍しく感じられたいらしい。東洋では、ある原因によってある結果が生まれるというような時間の経過による縦の関連だけではなく、あるものとあるものが、しばしば同じ意味を持って空間的に関連していると考えたりすることに興味を持つ

てくるのがわかるわけで、それが曲がって来たとしても、それほど不思議ではないだろう。

もっとわかりやすく言えば、二人の人がある角に向かって、二つの方向から歩いてくれば、当然、そこで二人は出会うわけだが、それぞれの人には、角をまがった先までは見えないから、偶然の出会いに思えるだろう。しかし、その二人をはるか上空から同時に見るものがあったとしたら、それは偶然ではなく必然的な出会いであることがわかる筈である。

そして、そこに媒介するものが、両者に働きかける力をもっていたとしたら、その媒介者は両者に歩くことを命じることもできるし、このような偶然の出会いを演出することもできるかもしれない。我々は危機的状況に立つと、神仏に祈ったりすることがあるが、それは、神仏がこのような媒介者としての力をもつものと思うからである。

ユングにとって、その力を持つ媒介者こそ、心の深層に存在すると仮定した元型であった。彼はそれをはつきりと確認するところまではいかなかったが、この共時性

という非因果的な現象は、おそらく個人を越えて集合的な影響力を持つとされる元型とかかわってあらわれるものと考えていたようである。そして、そうした偶然を縁として重要にとりあげる東洋人の考え方に、共感をもつたらしい。

二

一方、無意識的な集合性から考えられた共時性とは別に、すでに一九三〇年代から、物理学の実験には、観察者との関連も加えて考えられなければならないということが言われるようになった。理論物理学の世界で、もし正確に自分たちの考え出した理論を実験しようとしたら、ただ対象となるものを観察するだけではだめで、客体となるものと、それを観察する主体との関連を考えねばならず、さらにそこに使われる道具についても配慮しなければならぬということがわかりだした。

さらにまた、エネルギーとは連続的なものか、分離したものか、それは波動なのか粒子なのかというようなことから、エネルギーだけではなく、物質も波動であるか

こうして、ミクロの素粒子の研究から、単独な個体としての存在が否定されて、すべてのものの性質は、それ自体の本質ではなくて、まわりのものとの相互作用の中で、はじめて意味あるものとして理解されるのだという新しい考え方があらわれた。それはまたマクロの天体物理学の世界でも考えられるようになり、天文学者のホイールによれば、新しい宇宙の概念は次のようになる。

「宇宙論における今日の進歩は、つぎの事実をはっきりと示している。すなわち、もし宇宙の彼方がないとすれば、日常的な状況は存続し得ないし、もし宇宙の彼方がもたらされてしまったら、我々の空間や幾何学的形状の概念は、いっさい意味をなさなくなる。我々の日常の体験は、極めて細かいところまで、雄大な宇宙と密接につながっており、両者が分離していると考えるのは、もはや不可能に近い。」

ユングが共時性という概念をあげて述べようとしたことも、この物質的世界と人間の日常の意識との密接な関連であり、ものと心とは、さまざまな出来事を通して、常にかかわっているのであって、この両者はもはや別々

もしれないという考えが出てきた。たとえば、理論物理学者のシュレディンガーによれば、「主体と客体は、一つのものである。それらの境界が物質科学の最近の成果でこわれたということはできない。なぜなら、そんな境界などは存在しないから」ということである。

ここには、どこかユングの共時性の考え方に近いものがあるのではないだろうか。ものの存在は、長いこと固定的な絶対的存在として考えられてきたが、それは観察者という人間の意識が加わって、はじめてあると言えるのであり、その関係には、なにか両者を媒介する力が働いているようである。それはたとえば、有名な「不確定性原理」ということを提唱した物理学者のハイゼンベルクによれば、

「もはや世界は物体ではなく関連のグループに分割される。……区別できるのは関連であり、それが現象のなかでもっとも重要な要素である。……このように、世界は複雑な出来事の織物という姿を呈する。異なった種類の関連が入れかわり、重なりあい、組み合わせあって、全体の生地が決められる」のだという。

には考えられない。すべては大きな関連としてとらえなければならぬ、ということであった。

ここには、ユング自身が指摘しているように、東洋では古くから知られていた考え方があつた。たとえば儒教では、天子の行動と宇宙の運行とは密接にかかわっていると考えていたし、道教では、すべては道とよばれる一種の生命力のようなものの流れから生まれるという考えをもっていた。さらに仏教では、最初から、ものの実体を認めないという教えに基づいて、ものどものとのかかわりである「縁起」が基本的な原理とされていた。

仏教の教理の中でも、最も発達し、整理されている『華嚴経』では、あらゆるものが、他のすべてのものとかかわって存在していると説く。世界のすべての存在はそれぞれ独立しているわけではなく、他のすべてのかかわり、ひとつひとつの微塵の中に、微塵の数ほどある仏陀が存在し、互いに相手を照らしあっているという。理論物理学で現在わかっている究極的なもので、ハドロンとかクォークとよばれるものは、あらゆる粒子が他のすべての粒子を含み、自己調和的な形で、たがいに構成しあつて

いるということの説明に使われる概念で、これは『華嚴經』の考え方に類似している。

しかし、これらの概念は、日常的な時間や空間の中ではとらえられない、それ自体のルールを持つ一つの存在なのである。そしてユングの集合無意識と共時性の概念も、たまたま日常の次元に姿をあらわすことがあるが、ある意味では原理的なものでありながら、普段、どこにも見られる現象ではない。

ユングはそのために、これらの物理現象の根底にあるものと、自分が、臨床の場面で発見し、考えだしたものと類似は認めたが、彼にとっては、その心理的な意味が重要であったために、それを一般的な原理として認めることには、常に疑問があった。心理的な問題は、まったく日常的な世界にかかわるものであって、ものそれ自体の存在を語るものではない。しかし、時に起こることのあるこの不思議な心理的連関による合理性を越えた出来事に、非常に興味をひかれたのは事実である。

彼の晩年の研究は、ほとんど共時性の問題に集中している。物理学者のパウリとも、同じ大学にいた関係から、

方に夢を、他方に偶然の出来事を書きこんでいるような人だった。彼はこれらの、一見、なんの関連もないような現象の背後にあるものを、発見しようとしているかのようだった。UFOだとか、ハレー彗星のような宇宙的な現象と、それが人間の心と与える奇妙な感覚を楽しむ人で、たまたま彼が対話の中で述べた「異次元が洩れる」という言葉が、そのままこの本の題名になっている。

理論物理学や、天体物理学が語ろうとしている世界も、実は我々が生きている日常の次元のことではない。日常的な感覚で、これらの新しい学問を理解しようとしても、まったく理屈に合わないことになる。それは時間や空間という、日常の生活から生まれた概念を越えるか、あるいは少なくとも、違う時空の概念をもたなければ、理解できない世界の話である。

ユングが稀に起こる共時的な事柄に非常に興味を持ったのも、それが日常生活とは全く別な次元から、何かのはずみで洩れてくる異次元の出来事だったから、と考えることができるだろう。我々は普通、そんなことはあり得ないと思っているが、何かのはずみに、偶然の出来事

かなりこの問題について話し合っていたようである。しかし、パウリが日常生活とはほとんど関連のない理論の世界に没頭していたのに対して、ユングは日常生活におけるこまごまとしたことから、精神に異常をきたす人々のことに関心があったから、二人の会話は、原理的には一致点多かったであろうが、必ずしも話がかみ合うわけでもなかった。それは、パウリとユングの共著である『自然現象と心の構造』を読めば、理解されるであろう。

二人とも、科学思想がまだ独立する前の、ケプラーや錬金術師たちが活躍していた時代に戻り、その辺でなんとか一致点を見つけようとしているが、あまり成功しているとはいえない。

三

以前に私は、尾辻克彦氏との対談集を出したことがある。尾辻氏は、別名、赤瀬川源平としても知られているユニークな作家、もしくはアーティストだが、夢や偶然の出来事に興味があつて、ノートに赤と青のペンで、一

として、それを体験することがあり、その時に、なにか人間の生きていることの究極の意味のようなものを感じさせられるのである。

そして、このような考え方は、ユングの指摘を待つまでもなく、東洋人にとっては、昔から、それほど不思議なものとは考えられていなかった。そして仏教の經典には、これらのことが見事に描写されていた。たとえば、雑華嚴師の世界では、

「仏陀はもはや時空間でとらえられる世界には住んでいない。彼の意識は、感覚と論理に統制された普通の人のそれではない……雑華嚴師の仏陀は、それ自体のルールをもつ、ひとつの精神世界に住んでいる。」と説いている。

この日常性を越えて、なお日常の中に生きながら、それ自体のルールをもつ、ひとつの精神世界を体験し、その存在を知ることが、禪における悟りであるともいえるだろう。

物理学者のデヴィッド・ボームは、これまでの部分的な解明しかない機械論的な科学思想に反対する新しい

学者の一人だが、我々の眼には独立した部分として見える「明在系」の事象に対して、それらを全て包みこみ、一つの全体をなしている「暗在系」という構造があるものと考えた。この考え方には、ユングの無意識の元型による心の構造という考えや、この時空を離れ、なお我々の間に存在する仏陀という華嚴経の説くところと、共通したものといえよう。

こうして、科学と宗教、西欧と東洋は、ユングの共時性の概念から始まった新しい考え方をめぐって、接近しつつあるように思える。

現代は、地球だけが、この宇宙の中心ではなく、人々は地球を離れて、宇宙空間に飛び立ち、そこから地球全体を一目でみることもできるような世界になりつつある。こうした時代の流れと共に、我々は嫌でも進んでいくことになるが、そこに突然、新たに東洋の思想や、仏教の教えが再現するのを見ることは、一仏教徒の私にとっては、まことに楽しいことのように思われる。

異次元という言葉が、単に一つの頭で考えた観念ではなく、実際に体験できるところとなり、何千年もの歴史

そういう意味で、これからの新しい学問の世界は、単に知識的なことにとどまらず、人間の体験的な世界や、精神面も含んで考えなければならぬであろう。想像力と現実との両者を司ることができる人間の、本来の能力が輝きだすのは、実はこれからのだということもできよう。

(あきやまさとし・心理学者)

を持つ仏教思想が、新たによみがえり、無意識の領域という、人の日常的な考えを越えた心理的な世界について、さらに研究が深められるようになった。

これらはすべて、単に理念的なものではなく、毎日の我々の生活に密接にかかわることであり、それによって、実際に日常生活が深い影響を受けていることを、ここでもう一度認識し直すことは、大切なことのように思う。宗教にしても、科学または心理学にしても、我々の日常生活のさまざまな問題とかかわって、今日まで発展し、展開し続けてきた人間の一つの知恵である。

しかし、現代ではそれぞれの分野での研究が進み、または違うものとして発展してきたために、まったく専門的なものになり、今さら関係がつけ難くなっている。宗教はそれ自体で独立して、科学思想や心理学を排除するようになったし、物理学のような物質を中心に考える学問には、宗教や人間の心理のようなあいまいなものは、邪魔にこそなれ、必要はないものと考えられてきた。

現代は再びこうした学問が一つになって、新たな展開をみせようとしている時代である。